

山車「やぐら」に現された古里の歴史

見本重宏

はじめに ー古希になって振り返るー

私は、大阪南部泉州地域の田舎である阪南市新町で育ち、小さい頃から祭りを楽しんだ。当時の地区では「新入り」制度があり、15歳になると行司の下で祭りの手伝いを経て、やぐらの宮入曳航への参加が許され（一種の元服）、28歳になると行司役を務めた（祭り全体の準備と総括及び曳航責任者を担当）。当時の祭りは荒っぽく喧嘩や事故が多く、行司が色々な責任を負う為に、寄合の議題は「宮入曳航をするか」で始まり、宮入実施が決ると安全な曳航方法等に知恵を絞った。

私が行司を担った時、大学卒業後に機械メーカーに就職し営業をしていたが、休暇を取り、同級生と協力して役を務めた。一番記憶に残っているのは、宮入曳航時にやぐらが神社玉垣に激突、見物人に怪我をさせたが、迅速に対処し解決できたことだ。今思い起こせば、私には貴重な経験で、僅か28歳で大役を果たせた事に感慨深くなる。

さて、私の現役時代の2007年春、就寝中に不思議な事が起こり、以前から気になっていた家の墓を調べたら、「百回忌」に当る高祖母の名を発見した。その後、宝林寺過去帳を調べて家系図を作る中で、私が屋号である魚屋重左衛門11代目であることを初めて知った。この事が契機となり、私が営業として各地を回り、お客と一杯飲み懇談した時に、「語る事ができなかった古里に対する無知」が蘇り、忸怩たる思いが募ってきた。

折しも古希を迎えた私は、新町やぐら新調に関わる中で、古代史まで遡り集めていた情報資料を下に、「阪南市の特徴や地域性、祭礼とは何か」町の全体像解明に着手した。古代阪南市（以下、古称の鳥取郷を用いる）の歴史考察を進める中で、大和政権前後の重要な武器製造地としての実像が浮かび上がってきた。

また、昨年来のコロナ禍は、一種の戦争の様な国難であり、自由が制限され社会生活に甚大な損害を与え、祭礼も中止となる。そこで、私は祭礼が平和で安定した社会で行える事に気付かされた。

以下に、気付いた事を備忘録として書き留める。

1. 鳥取郷の古代史を巡る

ー鍛冶や製鉄技術集団の存在、古代の武器生産地ー

豊かな茅渟の海（大阪湾）と和泉山脈の狭間にある鳥取郷には、旧石器や縄文、弥生、古墳時代等の遺跡が、約30ヶ所存在している。また「日本書紀」には、垂仁天皇の皇子である五十瓊敷入彦命は、茅渟の菟砥河上宮で太刀一千口を作り、大和の石神神宮（物部氏の氏神）に奉納したとある。この五十瓊敷入彦命は、旧皿田池（現阪南市役所庁舎）に浮ぶ中島で宇土墓古墳として祀られ、明治の墓改修時に錆びた剣等が出土している。

私は、茅渟の菟砥川が波太神社の近くにあり、太刀一千口製作に必要な鉄や技術に注目し、鳥取郷の歴史解明を進めた。ポイントは、淡路島の五斗長垣内遺跡で弥生後期の鉄器製造工房が見付かったこと。即ち、鉄等の物流網が、朝鮮半島から鳥取郷まで存在してい

た可能性が高いことだ。また、波太神社祭神の天湯河棚命の「湯」は、「溶鉱炉で溶かした金属の事、金属の精錬に秀でた人」説があり、神応神天皇の八幡信仰にも通じる（※1説）。鉄の供給があれば、鳥取郷の鍛冶技術で刀の生産ができる。

ここで、当時の瀬戸内海や河内一体を支配していた古代豪族物部氏（饒速日命が始祖）の存在が重要。古代の鳥取郷も、当時河内に属し物部氏の影響下にあった。垂仁天皇から鳥取氏を頂いた天湯河棚命が、物部氏や五十瓚敷入彦命と繋がり、「太刀一千口」製作に関与した可能性が高い。総合すると、私は鳥取郷が古代の武器生産地だったと考える。

また、菟砥川上流の古墳群にあった玉田神社（波太神社境内の鳥取神社に合祀）は、五十瓚敷入彦命を祀り、刀剣製造場所「菟砥河上宮」の跡地と考える。更に、祭神の「瓚」は、光り輝く玉を意味し、玉田山の地名は瓚が玉に変化したと予測する。

その後、鳥取大宮の武器の神と八幡神が波太神社に祀られた。鳥取郷の古代史（太刀一千口伝承等）が、近現代に繋がる鳥取郷の気風や風土の起点になったと考える。

※1 谷川健一：東京帝大文学部卒、日本文学・民俗学・地名学が専門、1921→2013

2. 波太神社について（武人を祀る）

一灯籠には波多宮や八幡宮、波多大明神、八幡大権現の名がある一

波太神社は、2度の焼き討ち（戦国時代・大坂の陣）に会い、貴重な書物や宝物も焼失した。寛永15年(1638年)、江戸幕府の許しを得て再建、祭礼も復活し現在に至ると考える。また、現在の拝殿等は、先の大戦中に建設改修された。これも、神社が武人を祀るため、一種の戦勝祈願と思う。

1) 波太神社（旧呼称：鳥取大宮）の主要祭神

主祭神：角凝命は、出雲大国主命の系統（凝は、古代の専門的技能を持つ人に付く）

相殿神：応神天皇（仲哀天皇と神功皇后の子供、日本武尊の孫、八幡神）

末社祭神：神功皇后、武内宿禰、天湯河棚命

※1、天湯河棚命が、桑畑の地に祖神の角凝命を祀ったのが鳥取大宮であり、後に波太神社となる

※2、天湯河棚命の祖である角凝命を、応神天皇(八幡神)より上位の祭神としている。大本の鳥取大宮主祭神と一族の武器生産や技術に敬意を払ったと考える。

※3、相殿神の応神天皇は、八幡神として弓矢・武道の神として古来広く信仰される。武器を掌る神と武神を奉った神社であるが故に、源平合戦の武将の平重盛や梶原景時が、武具を奉納。更に、関が原合戦時に片桐且元（豊臣政権の五奉行）が、戦勝祈願の為に灯籠（波多大明神と八幡大権現の名を刻む）を寄進した。波太神社は、源平合戦から先の大戦までは、戦勝祈願の場であったと考える。

2) 貞観元年(859年)、鳥取大宮（祭神：角凝命）と指出森神社（祭神：応神天皇）が、石田の地に合祀された（阪南町史）。さらに同時代、宇土墓の存在を知った行教和尚が、神宮寺として神光寺(高野山真言宗)を創建した（明治政府より廃寺）。波太神社での神様と仏様の存在、神仏習合が「やぐら」の形状に影響を与えたと考える。

3) 神社名の統一表記

「延喜式」(927年撰進)に「波太」の文字を確認した為、鳥居の額「波多宮・八幡宮」

併記を「波太神社」に統一した。

- 4) 地区名の桑畑や石田、自然田の「田」でなく、何故「太」なのか。

波太神社の「神仏習合」を糸口に考える。古代では、仏陀や仏を「フト」「フツ」と呼称していた。フトに当る漢字の一つに「太」があり、使用例として太神や太神宮、太陽、太祖、太神楽、太閤等があり高貴や尊い事を表す時に使用されている。尊い神様や仏様の意味を表す、フト「太」を意図的に神社名に使用したと推測する。

更に、尊い「仏」を示す法輪が、やぐらゴマに具現化したと考える。

3. 波太神社の祭礼

一本祭：神輿渡御、宵宮：やぐら宮入 神輿を中心に

昔の神輿渡御（神輿の浜下り）は、提灯（波多宮と八幡宮）や太鼓を伴った行列で、神様の行幸である。天狗を先導役に、波太神社から桑畑（奥宮）、指出森神社、海老野での「潮かき神事」の後に、波太神社に戻る。海老の浜での神輿配置は、横綱の土俵入りの様に、露払い（鳥神輿）、横綱（鳳神輿）、太刀持ち（玉神輿）の順になる。

- 1) 神輿3基、鳳神輿や荒神輿について（格は、鳳神輿、鳥神輿、玉神輿の順）

鳳神輿には祭神の角凝命と応神天皇が鎮座し、荒神輿2基には「金色の幣：みてぐら」が鎮座する。幣を頂く荒神輿は、鳳神輿の周辺で舁き騒ぎ八百万の神々を集める「依り代」の役割があり、「神賑わい」「神遊び」の主演と考える。

- 2) 先導役の天狗（神仏習合の象徴。氏子の要望で増え、九面ある）について

神道の祭りであれば、道祖神の猿田彦（天孫降臨の案内役）となる。天狗は、神光寺（真言密教）の修験道や神仏習合の象徴として、先導役になった。

明治政府の神仏分離令により、猿田彦への変更もあったと考える。しかし、先人達が天狗の継続を判断したことに、神社への信仰心や叡智を学ぶことができる。

因みに、私が高校頃までの新町法被は、市松模様。この模様は修験者法衣の一つの図柄であり、当時の新町法被は神仏習合を表していたと思う。

- 3) 神輿を舁(か)く(かつぐ)。輿から車を取る舁になる。 ※別途漢和辞典参照

神輿は、上下や左右、回転等自在に担がれる。この動きはやぐら(2輪)のみ再現可能。

- 4) 「潮搔き神事」は、潮を搔き分け道を作る神事。

荒神輿が茅渚の海に入り舁き騒ぐ事は、八百万の神々に漁業で生計を立てる民の「安心安全・生活の繁栄の道が開かれる」ことを祈念した神事と考える。

- 5) 新村や貝掛地区の神輿渡御時の役割

イ) 享保7年(1723年)、新村は御旅所の海老の浜に神輿台を寄進した。何故か当時の代官から「北湊村」と連名付けられたことに、鍵がある。

「湊」の解字「奏」の意味より、海老の浜神事で「神饌を集めて神前に供える」役割があったと考える。(別途漢和辞典参照)

ロ) 貝掛地区は、波太神社相殿神を祭る指出森神社の氏子でもあり、神輿渡御行列には参加せずに、玉津浦の浜にて甲冑武者姿で出迎える役割があった。

ハ) 古来の神輿渡御は、各氏子村が協力して行っていた。現在、数地区が協力し8年毎の輪番制で担当している。唯一新町地区が単独で渡御を行っているのは、「神

饅を集め供える役割」と「氏子総代2名」に根拠があると推測する。

6) 波太神社祭礼になくてはならない伊勢音頭

泉州地域では、毎年7月頃伊勢大神楽が家々を回り、悪魔祓いの獅子舞を行い、伊勢神札を頂く習慣があり、伊勢神宮への親近感や憧れを持つ土地柄。伊勢音頭が浸透し、祭りに不可欠となる土壌は、伊勢大神楽によって醸成されたと思う。

7) 江戸時代の祭礼は、旧暦の2月（神輿渡御）と6月の丑の日にあった。6月には波太神社内に「やぐら」を曳き入れ夜通し祝い、その後に曳き帰る夜の祭。

4. 「やぐら」のお魂 と起源

ー神様と仏様（「オシャカサン」）、神仏の身代りとしての山車ー

現在の我々は、八百万の神々や仏のご加護を祈り、国民性として多神教であり、古代信仰に近い。やぐら新調では「入魂」や「昇魂」式があり、倉庫開きでも神主に祝詞を頂き入魂や安全祈願を行う。祭り最後に行う「オシャカサン」は、感謝と共に魂を抜く仏教儀式的様に思える。更に、曳航時の伊勢音頭囃子詞にも重要な意味がある（別途考察）。

1) 神輿説の検証（漢字「輿」の車に根拠を見出す）。

やぐら起源として祇園祭を起点に北回がだんじり、大和紀州経由の南回がやぐら等諸説ある。独特な形になる神社祭神に基づく神輿説を提唱する(2輪車になった理由)。

波太神社祭礼は、八坂神社の祭礼と同様に3基の神輿（本祭は神輿渡御）と山車（山鉾、地区保有で宵宮巡行）があり、神輿と山車が繰り出す数少ない様式。

江戸時代の信仰は、古代と同様「神仏習合」。波太神社山車は、両車輪上に神輿が乗った形。コマ形状は、仏陀を象徴した法輪と同じで、「神輿+法輪」で神仏一体を表す。神仏が、コマ（法輪）上部大屋根に鎮座、後部小屋根に神仏を守る武器庫(太鼓付)を台輪で一体化し、人が支える梶台を付けた輿や御所車が進化した形式と考える。

2) 「神輿とやぐら」の木組み共通名称より ー神輿の4本柱の基礎組み=台輪ー

神輿の台輪は、2本の舁棒を通す4本柱の基礎組みの事を指す。

やぐらの台輪は、大小屋根を支える柱の基礎組み事を指す。

神輿とやぐらには、共通の木組み名称があり、起源把握に重要と考える。

梶台(舁台)は、両サイド数名で支え全体の動きを制御する為にある。

3) 「神輿」と「やぐら」の動きの同一性や類似

神輿は、氏子が支え担ぐことで、上下や左右、回転など自由に動く。2輪のやぐらは、人が梶台を支え操作することにより、神輿の動きを再現できる。

疾走時、やぐら梶台を上げ、肩で支える時がある（やぐらを舁く・担ぐともいう）。

※隣町泉南市の「やぐら」には、梶台に数本の横棒（舁棒）を取り付けている。手で支えたり、肩を入れたりする様は、神輿を担ぐ姿と似ている。

4) 呼び名「やぐら」の起源について ー平和や村落共同体を守る城の抽象化や具現化ー

鳥取郷は、大和政権成立前後の武器生産地。波太神社の祭神は、武器や武道の神。地域の特徴と政権や地域住民守護の象徴神に着目し、呼び名の起源を考える。

戦乱の世で守るには、櫓（戦闘の為の建物）や矢倉（武器庫）が必要。呼び名「やぐら」は、地域を守る櫓や矢倉の役割を、村民統合の象徴として名付けたと考える。

※彫り物に神話伝説や武人・合戦が好まれるのは、古代信仰と共に武人への憧れ、江戸時代の武士道の道徳性や知性に有るのかも知れない。争いは、簡単に始まるが、終らせるのは非常に難しい。「諍いは、世の常であるが、神仏の下で仲良く祭りを楽しみ」「安易な争いを避け、地味な交渉力を磨け」と論しているとも言える。

5) やぐら屋根の榼や笹：神仏の「依り代」

竹は、古代信仰では結界（地上界との境界）を意味している。やぐら屋根の榼や笹は、結界や神仏の依り代を現し、神仏の御加護と厄払い(安全)祈願として使用する。太鼓等は、神事の始まりや神様の存在場所や通過等を村民に知らせる。

6) やぐら曳航方法の独特な表現の「しこる」について（神事としての相撲との類似）

やぐらが「しこる」とは、上下左右に激しく動く表現で、力士の「四股を踏む」から派生し、大地の神々を鎮める神事。さらに、相撲と同様に、「行司」が祭礼の仕切り役として存在していた。

7) その他

イ) 泉州地域の神社の中で、波太神社の様に鳥居の前に広場（馬場先）が有るのは珍しい。数台の「やぐら」が、一緒に駆け回る「馬場先」曳航を、「神賑わい」「神遊び」と理解するならば、神様に元気な姿を見せ、一体となり楽しみ感謝と喜びを表す神事と言える。その後、順次やぐらは、鳥居をくぐり太鼓橋で速度を増し、一気に階段を駆け上がり、拝殿の神様の下で「五穀豊穰」を祝う。

※馬場先：鳥居の前の広場で、参拝前に乗っていた馬や輿を止める場所

ロ) 納庫時の「オーシャカさん」「お釈迦さん」

祭礼は、伊勢音頭で始まり最後はお釈迦様で終る。来年までお釈迦様に「やぐら」のお守りをお願いしている様に思える。

下記は囃子詞の一例（地区により多少異なる）。

「オーシャカサンノ シヤントコセ モヒトツイオウテ、オーシャカサンノ
シヤントコセ モヒトツイオウテ、オーシャカサンノ シヤントコセ」

「オーシャカサンノシヤントコセ」とは、「お釈迦さん ちゃんとやぐらを守ってね」の意味と考える。物が壊れた時「お釈迦になる」と言うが、思い出が残る。名残を惜しむ故に仏になる。

ハ) 「やぐら」梶台について（通称「ながや」とも言う）

制御を基準にすれば梶取り台。「やぐら」を「神仏を守る城・櫓・武器倉庫」と位置づけるならば、長い矢・長い槍となり、「ながや」に通じる。

5. 「だんじり」とは

—やぐらは波太神社の神仏の身代り、曳航は神仏の行幸—

1) 「だんじり」木組名称では、本体基礎組が台木、屋根柱が舞台柱となっている。

人は、神様の上に乗る事は許されないが、動く舞台（屋台）であれば許される。低重心と4輪の安定性重視の下で、屋根での大工方の華麗な動きが際立つ荘厳な舞台（屋台）と考える。

2) 「だんじり」祭り

「やぐら」は波太神社祭神の化身であり、地元曳航は神様の行幸とも言える。

「だんじり」祭りは、疫病退散や五穀豊穡を祈り、村人が曳航する絢爛豪華な山車を、引手や太鼓、鳴り物、大工方の舞等と共に速度と「やりまわし」重視した、一糸乱れない操作性と迫力を見せる「神賑わい」「神遊び」の要素が非常に強い。

3) 「やぐら」と「だんじり」の区域

イ) 大坂夏の陣合戦場樫井川周辺を境に、南が「やぐら」(約 50 台)北が「だんじり」に分かれる。当初、豪華さの違いから、「地域経済力の差や京都からの伝承ルートの違い」と考えていたが、基本は神社の特性や地域の信仰の違いと考える。

特に、波多神社祭礼では、神輿の動きの再現と拝殿前階段を駆け上がる為に2輪車になったと推測する。

ロ) 樫井川に面する泉佐野市では、「曳きだんじり」「担いだんじり」「やぐら」「ふとん太鼓」「神輿」多種多様な祭り形式がある。「ふとん太鼓」(春日神社)は、「ふとんだんじり」や「布団神輿」とも言う。「担いだんじり」は、愛媛県伊予西条市にもあり、ここでも「伊勢音頭」が唱和されている。

ハ) 日根神社(泉佐野市日根野：樫井川上流山麓に位置)

昭和の初めまで「まくら祭」には数基のだんじり・神輿が一緒に出ていた。神輿は、担ぐ時や台車に載せお旅所までの行幸(日根神社 HP より)

昔の波太神社神輿渡御行列、波太神社から桑畑(奥宮)、指出森神社の道順は、狭く非常に厳しい山道。奥宮と指出森神社間では、写真の様に神輿渡御を行ったのではないかと、やぐら(神輿+二輪)の原型は、この形から進化した可能性もある。



4) 伊勢音頭の有無

音楽性でも、「だんじり」と「やぐら」では大きく異なる。「だんじり」曳航時には、音頭取りによる伊勢音頭の唱和は無く、基本は笛鉦太鼓によるリズムセクションを下に曳き手の掛声が主体。「やぐら」曳航時は、伊勢音頭や囃子声と共に、笛太鼓が能楽や雅楽の様な曲想を奏でる。提灯点灯曳航は、優雅で逍遙歌の様な雰囲気醸し出す。それは、波太神社の神楽殿で奏でられた音楽の影響かもしれない。

更に、やぐら曳航時には、地区ごとで異なるが伊勢音頭以外でも囃子唄(石山の秋の月 牡丹に唐獅子竹に虎・・・)民謡(ノエ節)等唱和されている。

6. 伊勢音頭囃子詞の意味について

—地域の発展永続を祈念する—

祭り参加者の一体感を醸し出す非常に重要な音頭。

1) 囃子詞の漢字を元に意味を推測する。(漢和辞典で漢字の意味等は別紙)

沖の暗いのに	ソーラ (其) セイ (正)	音頭取りを囃す(注目喚起)
白帆が見える	サー ヨーイヨーイ (世怡 世怡)	祭りができる平和な世を喜ぶ
あれは紀の国みかん舟		

ソーラ (其) ヤートーコセ (彌長久)

エー ヨーイヤナ (世怡彌成)

コリヤ ハリヤリヤ →コリヤ アララ? (案楽楽)

コレバイセ (是者伊勢)

ソーラ (其) ヨーイートセ (善所伊勢)

ヨイヨイヨイ (世怡 世怡 世怡)

それは、末永く栄える世

永続する素晴らしい世への喜び

音頭取りを囃す詞 (驚きの様)

それは伊勢

伊勢は喜ばしく素晴らしい所

今の世を皆で喜びましょう

私論

音頭歌詞は無数にある。地区により掛け声には多少の違いがあるが、主語は祭り参加者であり、神仏や村落共同体に対し、祭礼や祝い事ができる事の感謝や喜びを囃子詞で表現したと考える。更に、村民と一体になって地域の発展永続を祈念する囃子詞。

波太神社と神光寺 (真言密教) を読み解く中で、神 (自然) 仏 (個人) 習合、現代語では公私一体を表す掛け声と考える。

- 2) 石田千: 1968 生、エッセイスト、小説家、國學院大學卒で現東海大学文学部教授
漢字の万葉仮名や古事記日本書紀から解説 (エッセー「唄めぐり」から)

「彌長久世怡彌成 案楽楽是者伊勢 コノ善所伊勢」

「神様 (天照大神) が諸国を巡り、やっとよいところ (伊勢) を見つけて喜んだ」との伝説を歌う。主語が神、神様が喜んだ様子 (私論)。

- 3) 川守田英二 (かわもりた えいじ) 氏の訳 岩手県出身 1891- 1960

米国に渡り日本人教会の牧師、ヘブライ語の詩歌の研究家、サンフランシスコ大神学部卒、名誉神学博士

伊勢音頭囃子詞とよく似たヘブライ語民謡があることを発見する。関係は良く分からないが、参考資料として添付します。

伊勢音頭は、「伊勢は津で持つ 津は伊勢で持つ (ア ヨーイヨイ)

尾張名古屋は ヤンレ 城で持つ

「ササ ヤートコセ ヨーイヤナ アリヤリヤ コレワイセ コノナンデモセ」

川守田氏によれば、この「ササ」以下の囃子詞は、古代エジプト時代の航海の歌であって、モーゼの姉である女預言者ミリアムが唄った民謡。(旧約聖書出エジプト記より)

その民謡の意味は、

ササ (汝ら喜び悦べ)

ヤー・トコー・シェル (主は敵を海に投げ入れた)

ヤーエ・ヨハナン (主は憐み深く)

アハレリヤー (主を賛美しよう)

コレ・ワイシェ (主は人々を召し出して救われる)

コーノ・ナギイド・モーシェー (主はモーゼを立て導かれる)

主語が主 (神) で主を賛美崇めよ、選ばれた民への主の宣言文の様に思える (私論)。

- 4) 囃子詞意味の比較私論

泉州伊勢音頭の主語は、私達唱和する一般人や祭り参加者、祝い事の出席者。石田千氏の万葉仮名・古事記の観点で読み解いた意味は、主語が異なるが違和感がない。

「旧約聖書」は、敵を抹殺した主に感謝せよ！敵 (異教徒) に対する迫害を正当化、選

民思想が根底に潜んでいる。一神教と日本の多神教との違いが際立っており、ヘブライ語ではこのような恐ろしい意味があった事に驚いた。

発音が似ている日本の掛声とヘブライ語民謡の関係は、専門学者に委ねるしかない。しかし、祝い唄・囃子詞の漢字表記を知った事で、改めて、古代信仰神（自然）への恐れと畏敬・喜び・感謝に変えてしまった、日本民族の特異性と知恵を誇りに思う。

鳥取郷の特性（武器生産地）と波太神社の八幡信仰が、地域守護の象徴として「やぐら」に具現化され、伊勢音頭で平和や安寧の祈りと感謝を歌い一体となる。

私達は、今まで囃子詞の意味を理解せず、先人達の伝統を受け継ぎ歌い続けてきた（自覚無き信仰と言える）。古代史には余り興味はなかった。しかし新町やぐら新調を切掛けに、古代史を知る事で、波太神社祭礼に不可欠な伊勢音頭の意味を理解できた。

5) 鳥取郷「厄逃げ」風習と伊勢音頭の伝承

旧村では、厄年3年間の中秋の名月の日に「厄男は自宅の軒先や棟を見てはいけない」「厄逃げ」という古い習慣がある。当日、私も同級生と一緒に1泊2日の「厄逃げ」で伊勢神宮・熱田神宮参拝と温泉等に3回出かけ、男には有難い。

平和な江戸時代、一生に一度のお伊勢参りが流行となる。参拝後の精進明け(落し)宴会が楽しみとなる。鳥取郷の先人たちも「厄逃げ」等で伊勢参りに出かけ、楽しみの祝いの席で、芸者衆が歌う伊勢音頭を聞きながら酒を酌み交わしたと思う。

先人たちが地元に戻り、生活の糧として仕事（農・漁業他）に精進（精を出す）し収穫（五穀豊穡）の祝歌として泉州地域に伝わり、祝宴や祭礼に伝わったと考える。

7. あとがき

—「古里」「祭礼」「伊勢音頭」の謎解きを終えて—

私には、「新町やぐら世話人会」会長や曳航責任者を務めた平成21・22年、若い衆から持ち上がった新調計画を、白紙に戻した経緯がある。その後、平成26年に新調計画は、色々な議論を経て自治会の承認を得て決定した。しかし、私自身に何か心の中に物足りなさを感じていた。今私は、本年9月の「やぐら」完成を前に考察を書き上げた事で、スッキリした感情に浸っている。

更に、このあとがきは、我が家に江戸時代から伝わる仏壇の部屋で書いており、不思議にも28歳で務めた祭礼行司の時の事を思い出した。祖母が魚屋を営んでいた古い家で住んでいた為に、行司詰所として利用させてもらった。祖母に酒のつまみの枝豆作りを依頼した所、喜んで引受けてくれた。祖母が、かまどで枝豆を作りながら「祖父が祭り好きで、現在のやぐら部屋の土地を村に提供した事」等思い出話に華が咲いた。私が6歳の時、祖父が亡くなり記憶はほとんど無いが、祭り好きな祖父も喜んでいる様に思える。

昔の生活は不自由で楽しみや娯楽が少なく、祭りは神仏の下で村落共同体の楽しみ事や仲間との絆の確認の場でもある。しかし、個性豊かな人達もたくさんいて、祭りでは本領を發揮し揉め事や大騒ぎになる事も多々あった。祭りは、酒を飲み騒ぎ楽しむ要素がなければ継続できないが、争い事を巧く納める人達もいた。

今回、やぐら新調を契機に、古里の歴史を振り返ることにより、武器生産地の鳥取郷と波太神社祭神、「やぐら」が一本の線で繋がった。「やぐら」には、地域の特徴や祭神に現

れる人物像や思想を宿している。基本思想は人々の生活を守護し発展させる事にある。

時には「やぐら」に体现された「武人への憧れ」「武勇を尊ぶ」心情には、地区の生活や平和を侵す物に対して、武をもって戦い守る姿勢が根底にある。この心意気が、波太神社馬場先での各地区やぐらの競い合い時に、争い事に転化し「石田の血祭り」と言われた荒っばい祭りの要因と考える。

一方、祭りでは伊勢音頭囃子詞で世の平和や繁栄を歌い上げ、やぐらの武勇と音頭の平和への願いが調和されている。これらが古里の気風や気質を育んだと思う。

半世紀前頃までの祭は、夜になると荒っぼくなり、警官隊が来るまで「やぐら」を納庫せず、結果的に日付が変わる事も多々あったが、今ではありえないことだ。

現在の祭礼は、警察の規制が厳しく各地区の保存会が中心に各種取決めの下、自己警備や安全重視の祭り運営が行われ、昔のような争い事も少なくなっている。

また祭礼は、国民生活や地域社会の状況も反映する。バブル崩壊以降の97年消費増税を契機にデフレ（国民所得の減少）が続き、非正規雇用の増大や国民の貧困化、格差拡大等も地域社会に影響を与えていると思う。更に、コロナ禍が追い討ちを掛けている。

残念なことです、最近各地区青年団員数が減少傾向にあることをよく耳にする。この様な状態が続けば、伝統文化の継承発展が難しくなり気掛かりでもある。

本年9月に新町「やぐら」は完成するが、「コロナ禍」が全国的に深刻化する中、10月祭礼の開催も難しくなっている。しかし、私は古里の歴史や祭礼を自分なりに理解したことで、新調「やぐら」と対面した時にどのような感情がわいてくるか楽しみだ。

本稿が先祖の霊を祀るお盆にできたことで、私は2007年先祖の墓発掘から古里の歴史調査まで続いた何か宿命の様な感じがしている

今こそ、コロナ禍の教訓も踏まえて、明日への一步を踏み出す為に、歴史を活かし英知を結集する必要があると考える。

最後に、情報提供やアドバイスを頂いた、波太神社神主様始め友人の皆様に感謝申し上げます。

2021年（令和3年）8月15日稿

参考文献

阪南町史、阪南町遺跡分布図、阪南市 HP(文化財あれこれ他)、波太神社 HP・西鳥取村村史、東鳥取村村史、碑文「皿田池の由来」「宇土の墓」、各種古代史関連図書「記紀」解説関連本、「阪南市地名の起源を見直す」「仏教公伝以前の仏教」等各種ネット調査(ウイキペディア他)、Uチューブ、カシオ電子辞書(広辞苑・漢和辞典)

阪南市祭礼理解の為の動画・資料等の紹介 (URL)

波太神社：神輿渡御（本宮） <https://youtu.be/Xse8kczDETO>
やぐら宮入波太神社石段駆け上がり（宵宮） <https://youtu.be/xKn0lC-0hJ0>
各地区「やぐら」紹介 <http://yagura.main.jp>
伊勢大神楽 <https://youtu.be/YAGxleAYxHo> <https://youtu.be/tisW2k-ZJ9Q>

以上

以下は、カシオ電子辞書の広辞苑や漢和辞典での漢字等の検索結果です。

伊勢音頭囃子詞解説用

1. 弥、彌(旧字体)

- ① 意読：わたる/あまねし/とおいひさしいいよいよいや
- ② 意味
 - 1) (動) わたる。時間や距離の経過。「弥久=久しきに弥る」
 - 2) (形) あまねし。広く端まで行きわたっている様
 - 3) (形) とおい・ひさしい。関係や時間がとおい端まで及ぶ様。「弥甥(ヒセイ)」(遠縁の甥)
 - 4) (副) いよいよ。遠くに伸びても、何時までも衰えない意を表す。
- ③ 難読語 弥栄(イヤカ)：新町では宮入時納戸時に乾杯の合図で使用。繁栄を祈って叫ぶ声。いよいよ栄える事。「御国の弥栄を祈る」

2. 怡、 類語：喜

- ① 字音：イ
- ② 音読：よろこぶ/よろこばす
- ③ 意味
 - 1) (動) よろこぶ。よろこばす。心が穏やかに和む。心を和らげる。
「怡怡(イイ)」：喜び楽しむさま。
「秦王不怡者良久」=秦王不怡(よろこ)ばざる者良久(ややひさ)し

3. 其：キ、ギ、それ、その 広辞苑：そら(其)指示して注意を促す語

- ① 語法「それ」感嘆・強調等の語気を示す

4. 正：セイ

- ① 意味(名) 役目の長官。「楽正(音楽をつかさどる役所の長官)」音頭取りにも通じる

5. あらら(案楽楽) (感) 驚いた時などに発する声

6. コリヤ (感) 驚いた時に発する語。音頭や民謡の囃子詞

7. さ(サー)(間投助詞) 語句の切れ目に付いて調子を整え軽く念を押す意思を表す。

(接頭語) 名詞・動詞・形容詞の上に付いて語調を整える語。

8. え(エー)(助詞) 感動を表す。名詞などに付いて呼び掛けに用いる。

(接頭) 名詞に付いて「愛すべき」の意を表す。

神輿や新村の別名「北湊村」、やぐら等の解説用として

1. 輿 字音：こし/かつぐ/のせる 同⇒昇(ヨ) 神輿を昇(カ)く(かつぐ)。

意味

- ① こし。車軸の上に置いて、その上に人や物を載せる台。輿は「車+昇」で平均を保って担ぎ上げる。転じて、人や物を載せて担いで運ぶ乗り物。

- ② なんんかが手を揃えて担ぎ上げる。皆が力を揃える様。

解字：四本の手を揃えて担ぎ上げる様。輿は平均を保って担ぎ上げ、その上に人や物を載せるこしや車の台

2. 湊 みなとの類語：港・津

字音：そう

音読み：みなと・あつまる

意味

① みなと。

② あつまる。多くの物がそこへとしばられるように集まる

解字：奏

奏は「お供えの獣の体+両手」の会意文字で「供え物を集めて神前に向けて進めるさま」ある方向に集まる意を含む。物をそろえてまとめる意味を含む。

湊は「水+奏」で、水路がそこへあつまる

3. 昇 神輿を昇(カ)く (かつぐ) に使用

字音：ヨ

音読み：かく

意味：(動)かく 二人が両手で物を担ぎ上げる

解字：「臼(両手)+升(両手)」で、四本の手で同時に担ぎ上げる。

4. 搔 字音：ソウ 音読み：かく/さわぐ/かき 潮搔き神事

意味；①(動)かく。つめでひっかく

②(動)さわぐ。せかせかとさわぐ 同⇒騒

「搔き分ける」：左右に分け開く、押分ける。人ごみを搔き分ける

5. やぐら、矢倉、櫓について

①武器を納めておく倉

②四方を展望するために設けた高楼。城郭建築では、敵情視察または射撃の為の城門や城壁などの上に設ける。

③材木等を組みあわせて高く作った構造物

その他

1. 瓊 五十瓊敷入彦命(垂仁天皇の子供、物部の氏神；石神神宮の神宝管理)より

字音：ケイ/ギョウ 意読：たまに

意味：(名)たま、に、にぎたま、光り輝く玉、 類⇒瑩(エイ)

解字：「玉+(音符)復(ケイ)」

難読語：瓊缶(にべ)、瓊田(たまだ)⇒玉田山古墳？

2. 饒 饒速日命より

記紀神話で、天孫降臨に先立ち天より降り、長髓彦(カスネヒコ)の妹三炊屋姫(ミカジキヤヒメ)を妃としたが、神武天皇東征時に長髓彦を誅して天皇に帰順する。古代豪族物部氏の始祖と伝える。

字音：ジュウ 意読：ゆたかにぎわう/おおい/ゆるす

意味：(形動)ゆたか、にぎわう、たっぷりある

解字：「食+(音符)堯(大きくたわむ)」食糧事情が豊富でゆとりがある。

以上